

〈資料〉

人生の最終段階にある高齢者に対する看護テキストの分析による 教育内容の検討

今野 あかね

(看護学部看護学科)

A Study of Educational Content by Analyzing Nursing Texts for the Elderly in the Final Stage of Life

Akane KONNO

(Department of Nursing, Faculty of Nursing)

「多死社会」に突入している日本において人生の最終段階にある高齢者に対して生命よりも人生が優位であることを理解し、その看護に精通した看護師を養成することが求められる。本研究は国内の老年看護学のテキストの内容を比較し、教育内容を検討することを目的に記述内容を分析した。その結果、2. 国内外の現状、5. 「生命倫理」(死生観・安楽死・尊厳死)、6. 社会的苦痛について(家族関係・地域との関係・経済的問題など)、11. 人生のQOL 患者の生活の質(QOL)の評価法、12. 人間尊重(自立性の保持や自己の存在を肯定的にとらえ、生きる意味や目的を見出すことができる)、13. スタッフや学生自身のグリーフケア、14. 老衰・老衰死、については記載内容が乏しくいくつかのテキストを組み合わせることで学習すべき内容を網羅することができることが示唆された。

キーワード: 高齢者、人生の最終段階、基礎看護教育、テキスト、教育内容

はじめに

日本は2021年の年間死亡者数が約142万人(厚生労働省, 2021)であり、2040年には約166万人となる(厚生労働省, 2018)と予測され、「多死社会」に突入している。そのような社会状況の中で人生の最終段階における医療において厚生労働省は、終末期医療に関する国民の意識が変化していることや、「終末期医療のあり方」について、広く患者・家族・医療職が合意できる基本的な点を整理し、2007年に「終末期医療の決定プロセスに関するガイドライン」(厚生労働省, 2007)を作成した。さらに、最期まで尊厳を尊重した人間の生き方に着目した医療を目指すことが重要であるとの考え方にに基づき、2015年には従来使われていた「終末期医療」とい

う表記を「人生の最終段階における医療」に変更することとなり、「人生の最終段階における医療の決定プロセスに関するガイドライン」(厚生労働省, 2015)に変更された。生存期間を重視した医療から日本老年医学会の高齢者終末期医療のガイドラインである「立場表明2012」がいうように「本人の満足を物差し」に考える医療の転換が行われた。すなわち人生の最終段階においては、生命よりも人生が優位と考える医療や看護・介護が必要とされている。

看護職はこれまでも人生の最終段階にある様々な年代の人々を看護してきたが、高齢化の進展により、さらに人生の最終段階にある高齢者へ看護を提供する場面が増加している。そのため、人生の最終段階にある高齢者に対して生命よりも人生が優位であることを理解し、その看護に精通した看護師を養成す

ることが求められる。

文部科学省(2019)は「看護学教育のコアモデルカリキュラム」で「老年期にある人々に対する看護実践」の中に「人生の最終段階にある人々への看護実践」を挙げ、看護基礎教育の中で人生の最終段階にある高齢者や家族への看護実践充実させる必要性を打ち出している。卒前教育を充実させるためには質の高いテキストが欠かせない。今回、人生の最終段階にある高齢者への看護に関するテキストの記述内容を比較し、教育内容を検討することを目的に精読を行ったので報告する。本調査の結果は、我が国の人生の最終段階にある高齢者への看護に関する教育の質の向上に資すると考える。

1. 研究方法

(1) 研究デザイン

大学で採用されていると思われる人生の最終段階にある高齢者に対する看護テキストについて独自に作成した調査票を用いて文献レビューを行う。

(2) テキストの選出

国立情報学研究所が運営するCiNiiBooksを用いて、「老年看護」「高齢者看護」を索引語として検索を行った。CiNiiBooksを用いた理由は、全国の図書館に所蔵されている図書はテキストとして採用されている可能性が高いと判断した。2016年以降し

た理由は2015年3月には従来使われていた「終末期医療」という表記を「人生の最終段階における医療」に変更することとなり、「本人の満足を物差し」に考える医療の転換が行われ看護も転換したと考えた。そのため2016～2021年の過去5年間に発行された書籍を検索した。除外基準は雑誌、国家試験対策、特定の大学で出版されている書籍とした。また改訂版があるものは最新版を採用した。複数冊でひとつのシリーズとなっているテキストは、シリーズで1冊とカウントした。

(3) 分析方法

収集したテキストからテキストの総頁数、人生の最終段階にある高齢者に対する看護の内容が書かれた頁数と総頁をもとにパーセンテージを算出し、基本情報として抽出した。さらに人生の最終段階にある高齢者に対する看護についての主な頁の見出しも抽出した。詳細な内容として平川ら(2008)は老年医学に関する教科書の内容を分析するために調査票を作成している。この調査票は老年医学の内容であるため、平川の調査票を参考に長江(2018)のエンドオブライフケアの看護の実践の構成要素と老年看護で必要と思われる「学生のグリーフケア」「老衰」「人生の最終段階の看護過程」を追加し、重複や医師が実践する内容を修正加筆し、15項目の調査票(表1)を作成し記述の有無について調査した。

表1 人生の最終段階にある高齢者に対する看護に関する調査票

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 歴史的背景 2. 国内外の現状 3. 社会・法的制度(ホスピス・在宅医療) 4. 「人生の最終段階にある高齢者に対する看護」の定義や用語 5. 「生命倫理」(死生観・安楽死・尊厳死) 6. 社会的苦痛について(家族関係・地域との関係・経済的問題など) 7. 死にゆく患者の心理過程およびそのケア 8. 意思表示支援・治療の選択インフォームドコンセント(病名告知・事前指定書などの自己決定を含む) 9. 家族ケア(家族の想い、家族による意思決定、遺族ケアも含む) 10. 疼痛・症状マネジメント 11. 人生のQOL・患者の生活の質(QOL)の評価法 12. 人間尊重(自立性の保持や自己の存在を肯定的にとらえ、生きる意味や目的を見出すことができる) 13. スタッフや学生のグリーフケア 14. 老衰・老衰死 15. 人生の最終段階にある高齢者に対する看護過程 |
|---|

(4) 用語の操作的定義

高齢者の人生の最終段階という言葉がターミナル、終末期とは全く同一でなく、近い概念はエンドオブライフケアの概念である。しかしエンド・オブ・ライフ・ケアが1990年代後半に用いられるようになった比較的新しい概念であり、いまだ決定的な定義がない。また、エンド・オブ・ライフ・ケアは高齢者のみを対象としている概念でないため、終末期看護や看取りケア、緩和ケアなど様々な用語が使われている現状がある。本研究の人生の最終段階にある高齢者に対する看護は百瀬ら(2019)の定義と日本老年医学会(2012)の定義を参考に「病状が不可逆的かつ進行性で。その時代に可能な限りの治療によっても病状の好転や進行の阻止が期待できなくなり、近い将来の死が不可避となった状態の高齢者一人ひとりが自分の価値観や文化を大切にしながら、自分らしいライフ(生命・生活・人生)を最期まで尊厳をもって生きることができるよう支える看護」とした。

2. 結果

CiNiiBooksを用いて、2016～2021年の「老年看護」「高齢者看護」を索引語として検索を行った結果47冊が抽出された。抽出された書籍から、除外基準をもとにA～Iの9冊(表2)のテキストを選択した。

(1) 教書の総ページ数と記述のパーセンテージ

人生の最終段階にある高齢者に対する看護の記述パーセンテージは2%～6%であった。

(2) 人生の最終段階にある高齢者に対する看護についての主な頁の見出し

「エンドオブライフケア」2冊、「高齢者のエンドオブライフケア」2冊「その人らしい最期を迎えるための援助」、「高齢者の終末期における看護」、「高齢者の尊厳を支える看取り」「高齢者の人生の最終段階における看護」「終末期の看護」がそれぞれ1冊であった。

(3) 調査票の記述内容の比較(表3)

調査票の記述内容15項目のうち1.歴史的背景、3.社会・法的制度(ホスピス・在宅医療)、4.「人生の最終段階にある高齢者に対する看護」の定義や用語、7.死にゆく患者の心理過程およびそのケア、8.意思表明支援治療の選択インフォームドコンセント、9.家族ケア(家族の想い、家族による意思決定、遺族ケアも含む)、10.疼痛・症状マネジメントについてはほとんどのテキストに記述があった。15.人生の最終段階にある高齢者の事例や看護過程は6冊に記述があった。

1から4冊と記述内容で少なかったのは2.国内外の現状、5.「生命倫理」(死生観・安楽死・尊厳死)、6.社

表2 対象文献一覧

ID	書名	出版年	編著者	出版者
A	『老年看護学 高齢者の健康生活を支える看護 第2版』	2017	太田喜久子	医歯薬出版
B	『系統看護学講座 専門分野2 老年看護学 第2版』 『系統看護学講座 専門分野2 老年看護病態疾病論 第5版』	2018	鳥羽研二他・北川公子 他	医学書院
C	『高齢者看護学 第3版』	2018	亀井智子・児玉敏江	中央法規
D	『これからの高齢者看護学 考える力・臨床力が身につく』	2018	島内節他	ミネルヴァ書房
E	『老年看護学 概論と看護の実践 第6版』	2019	百瀬由美子他	ヌーヴェルヒロカワ
F	『新体系看護学全書 健康障害をもつ高齢者の看護 第5版』 『新体系看護学全書 老年看護学概論/老年保健 第5版』	2020	亀井智子	メヂカルフレンド社
G	『看護学テキスト nice 老年看護学概論:「老いを生きる」を支えることとは 改訂第3版』 『看護学テキスト nice 老年看護学技術:・最後までその人らしく生きることを支援する 改訂第3版』	2020	真田弘美・正木治恵	南江堂
H	『最新老年看護学 第3版』	2021	水谷信子・水野敏子他	日本看護協会出版会
I	『ナーシング・グラフィカ 老年看護学高齢者看護の実践 第5版』 『ナーシング・グラフィカ 高齢者の件呼応と障害 第6版』	2021	堀内ふき他	メディカ出版

表3 調査票の記述内容の比較

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	合計
総ページ数	184	760	364	325	457	596	863	388	764	
人生の最終段階にある高齢者に対する看護についての主な頁の見出し	その人らしい最期を迎えるための援助	エンドオブライフケア	エンドオブライフケア	高齢者のエンドオブライフケア	高齢者のエンドオブライフケア	高齢者の終末期における看護	高齢者の尊厳を支える看護	高齢者の人生の最終段階における看護	終末期の看護	
人生の最終段階にある高齢者に対する看護の記載頁数	8	25	10	12	11	15	43	25	26	
記載頁のパーセンテージ	4%	3%	3%	4%	2%	3%	5%	6%	3%	
1. 歴史的背景		○	○	○	○	○	○	○	○	8
2. 国内外の現状					○			○		4
3. 社会・法的制度（ホスピス・在宅医療）	○	○	○		○	○	○	○	○	8
4. 「人生の最終段階にある高齢者に対する看護」の定義や用語	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9
5. 「生命倫理」（死生観・安楽死・尊厳死）		○					○	○	○	4
6. 社会的苦痛について（家族関係・地域との関係・経済的問題など）										0
7. 死にゆく患者の心理過程およびそのケア	○	○	○	○		○	○		○	7
8. 意思表示支援 治療の選択インフォームドコンセント（病名告知・事前指定書などの自己決定を含む）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9
9. 家族ケア（家族の想い、家族による意思決定、遺族ケアも含む）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9
10. 疼痛・症状マネジメント	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9
11. 人生のQOL・患者の生活の質（QOL）の評価法					○			○		2
12. 人間尊重（自立性の保持や自己の存在を肯定的にとらえ、生きる意味や目的を見出すことができる）				○	○		○	○		4
13. スタッフや学生のグリーフケア									○	1
14. 老衰・老衰死		○	○				○		○	4
15. 人生の最終段階にある高齢者の事例や看護過程		事例	事例	看護過程		事例	看護過程	事例		6

会的苦痛について（家族関係・地域との関係・経済的問題など）、11. 人生のQOL 患者の生活の質（QOL）の評価法、12. 人間尊重（自立性の保持や自己の存在を肯定的にとらえ、生きる意味や目的を見出すことができる）13. スタッフや学生自身のグリーフケア、14. 老衰・老衰死であった。

3. 考察

今回の調査で人生の最終段階にある高齢者に対する看護に関する記載頁は2から6%であり全体の占める割合は少なく、今後教育内容の洗練とともに充実してくるものと考えられる。

項目で2. 国内外の現状、5. 「生命倫理」（死生観・

安楽死・尊厳死）、6. 社会的苦痛について（家族関係・地域との関係・経済的問題など）、11. 人生のQOL 患者の生活の質（QOL）の評価法、12. 人間尊重（自立性の保持や自己の存在を肯定的にとらえ、生きる意味や目的を見出すことができる）、13. スタッフや学生自身のグリーフケア、14. 老衰・老衰死、については記載内容が乏しく、いくつかのテキストを組み合わせることで学習すべき内容を網羅することができると考える。

特に6. 社会的苦痛について（家族関係・地域との関係・経済的問題など）、11. 人生のQOL 患者の生活の質（QOL）の評価法、12. 人間尊重（自立性の保持や自己の存在を肯定的にとらえ、生きる意味

や目的を見出すことができる)、14. 老衰・老衰死についての項目は、高齢者を生活者であるにとらえ、長江(2018)が「人生のQOL」の看護実践は抽象的で曖昧なことであるため暗黙化していることが多いと述べているようにその人自身が人生の質や幸福とは何かについて考え、意識化するように働きかける具体的な看護実践について明らかにし、教授していくことが必要であると考え。また長尾ら(2020)が行っているような老衰死の視覚教材を用いた教育実践などのように自然な死の過程について学生が学べるような教育内容を検討する必要があると思われる。そのためには人生の最終段階にある高齢者の事例や看護過程を充実させ紙面上ではあるものの看護実践について理解できるような記述が必要であると考え。

13. スタッフや学生自身のグリーフケアについては学生のグリーフケアの記述はなくスタッフのデスクカンファレンスやグリーフケアについて書かれた記述が1冊のみであった。永田(2020)は終末期ケアを体験した看護学生を対象とする過去10年の研究論文の検討から学生が負の感情を抱くと分析している。今後も学生が老年看護学実習で受け持ち患者の死に対面することが増えると考えため学生自身のグリーフケアとその対応方法についても教授する必要があると考える。

おわりに

老年看護学のテキストを分析した結果、文部科学省の「人生の最終段階にある人々への看護実践」という統一した表現でなく様々な概念が混在して提示されている。今後も人生の最終段階にある高齢者の看護については明らかになっていくとか考え、国内外の動向について知り、教育内容を検討していく必要性がある。

《引用文献》

平川仁尚・葛谷雅文・植村和正(2008)「日本の終末期ケアおよび老年医学に関する教科書の内容－高齢者の終末期のケアに関する内容分析－」、『ホスピスケアと在宅ケア』, 16, 213-217.
堀内ふき・諏訪さゆり・山本恵子(2021)『ナーシング・

グラフィカ老年看護学高齢者看護の実践第5版』, メディカ出版.
堀内ふき・諏訪さゆり・山本恵子(2021)『ナーシング・グラフィカ高齢者の健康と障害第6版』, メディカ出版.
亀井智子(2020)『新体系看護学全書健康障害をもつ高齢者の看護第5版』, メヂカルフレンド社.
亀井智子(2020)『新体系看護学全書老年看護学概論/老年保健第5版』, メヂカルフレンド社.
亀井智子・小玉敏江(2018)『高齢者看護学第3版』, 中央法規出版.
北川公子(2018)『系統看護学講座専門分野2老年看護学第9版』, 医学書院.
厚生労働省(2007)『終末期医療の決定プロセスに関するガイドライン』, (<https://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/05/dl/s0521-11a.pdf>) (2021年10月30日最終閲覧)
厚生労働省(2015)『人生の最終段階における医療の決定プロセスに関するガイドライン』, (<https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-10802000-Iseikyoku-Shidouka/0000079906.pdf>) (2021年10月30日最終閲覧)
厚生労働省(2018)「地方制度調査会専門小委員会厚生労働省ヒアリング資料2040年頃の社会保障を取り巻く環境」, (https://www.soumu.go.jp/main_content/000573859.pdf) (2021年10月30日最終閲覧)
厚生労働省(2021)『令和3年5月人口動態速報』, ([file:///C:/Users/satok/Downloads/r0305%E9%80%9F%E5%A0%B1%20\(2\).pdf](file:///C:/Users/satok/Downloads/r0305%E9%80%9F%E5%A0%B1%20(2).pdf)) (2021年10月30日最終閲覧)
正木治恵・真田弘美(2020)『看護学テキスト nice 老年看護学概論:「老いを生きる」を支えることとは改訂第3版』, 南江堂.
水谷信子・水野敏子・高山成子・三重野英子・會田信子(2021)『最新老年看護学第3版』, 日本看護協会出版会.
百瀬由美子・奥野茂代・大西和子(2019)『老年看護学概論と看護の実践第6版』, ヌーヴェルヒロカワ.
文部科学省(2019)『看護学教育のコアモデルカリキュラム』, (https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afeldfile/2017/10/31/1217788_3.pdf) (2021年10月30日最終閲覧)

- 長江弘子 (2018) 『看護実践にいかすエンド・オブ・ライフケア第2版』, 日本看護協会出版会.
- 長尾匡子・山本裕子 (2020) 「高齢者の終末期医療や老衰死についての看護学生の認識」, 『老年看護学』, 25, 132-138.
- 永田まなみ (2020) 「終末期ケアを体験した看護学生を対象とする過去10年の研究論文の検討学生の感情・変化と学び・求められる教育的支援」, 『北海道生命倫理研究』, 8, 21-30.
- 日本老年医学会 (2012) 『高齢者の終末期の医療およびケアに関する日本老年医学会の立場表明』 (<https://www.jpn-geriat-soc.or.jp/tachiba/jgs-tachiba2012.pdf>) (2021年10月30日最終閲覧)
- 太田喜久子 (2017) 『老年看護学高齢者の健康生活を支える看護第2版』, 医歯薬出版.
- 鳥羽研二 (2019) 『系統看護学講座専門分野2 老年看護病態・疾病論第5版』, 医学書院.
- 真田弘美・正木治恵 (2020) 『看護学テキスト nice 老年看護学技術:最後までその人らしく生きることがを支援する改訂第3版』, 南江堂.
- 島内節・内田陽子 (2018) 『これからの高齢者看護学:考える力・臨床力が身につく』, ミネルヴァ書房.
- (受付日:2021年10月31日、受理日:2022年1月12日)